

たかを確認めた。子供たちはすべての質問に正しく答えていて、とても嬉しかった。

本プログラムは結局、小学生の子供たちにとって、日本以外の文化にルーツを持つ学生らから、違う文化、違う習慣、違う価値観などについて聞けるとても良い場であった。それと同時に、発表者大学生にとっても、大学などでやるのと違うような形で発表できる良い機会であったでしょう。

ここ数十年発達してきたグローバリゼーションの影響で、日本もだんだん様々な国籍を持つ人々と共に暮らさなければならない多文化共生社会になっていくに違いない。そうすると、日本人もより多くの外国国籍の人と関わり、いろいろな価値観や考え方を理解できるようになら

ないといけない。「サマースクール」プログラムも、目標の一つとして、上述のものをも取り入れているのではないかと思った。今回あったように、さまざまな背景を持つ人々と出会い、異なる文化や地域について知ることによって彼らの世界観が広がり、これからあらゆる場面で「異なる人」と向き合うときに困難はないでしょう。

当日の子供たちの新しい情報を知った時の表情、外国にルーツを持つ我々が自分たちの文化について日本人子供たちに聞いてもらえた上で我々の満足感から、このようなプログラムはこれからも数多く採用され、定期的実施していくべきだと思った。それが、現在日本における外国に対する距離感の急速な縮小をもたらすからである。

## かけはし「学びの教室」に参加して —自分の出来たことを振り返る

国際学部国際学科 2年

木村マリアナ リサ

田巻先生が担当する授業「グローバル・イシュー研究演習Ⅱ」は、「外国人生徒の学びの場」をテーマとするもので、フィールドワークとして、小山市が10月から土曜日午前中に開催しているかけはし「学びの教室」に全員が一度は参加し、主に高校進学を目指して勉強している外国人生徒に学習支援してきた。

私は11月2日のかけはしに参加し、日本の学校に通う外国人の子どもたちと触れ合うことが出来て、その子たちへの教育サポートの大切さを改めて感じた。外国から来た子どもたちの大半は、日本の学校に入学する場合が多い。しかし、日本で生まれた子どもたちとは違い、外国から来た外国人児童生徒は入学時点で日本語が出来ない子が多い。かけはしに参加したことでそういった事情を抱える子どもたちの手助けをする体験が出来たような気がする。

学習支援は9時から11時半ころまで3回あり、それぞれ45分だった。教える教科は、国語、数学、英語、理科、社会だった。私はその日、3人の生徒の勉強をみることとなった。担当した教科は、社会と国語の2つだった。1人目の生徒は女の子で、第一次世界大戦について、社会の歴史の部分を勉強していた。その生徒はしっかり予習もしてきていたようなので、手始めに分かる問題を紙に回答してもらい、終わった後は復習もかねて一緒に教科書の文章を音読して答え合わせをした。読み進めるうちに読めない漢字や意味が分からない言葉があるかどうかも確かめ、あった時は理解してもらえるように頑張って説明した。彼女は宿題については大体出来ていたが、「人物名を覚えるのが一番難しい」と言っていた。

次に勉強をみたのは、小学生の女の子で、その子は国語の勉強をしていた。私は、日本でずっとブラジル学校に通ってきて、日本の学校に通っ

たことがないので、国語がどういう内容のものかあまり想像がつかなくて、果たして何か手伝えるのか不安だったが、一緒に国語を担当していた他の学生に何をすればよいのか相談して、何とか宿題を進めることが出来た。彼女は古文というものを学校で習っていて、漢字の読み方が分からなく苦戦していたので、分からない漢字の読み方を教えてサポートした。

最後は中学生の男の子の勉強をみることとなったが、その子は自分と同じブラジル人で、勉強は母語で説明してほしいということで、私が担当を任された。彼も古文を習っていて、練

習問題のところで「何か分からないところはあ  
る？」とポルトガル語で聞けば、「問題文の意味  
が理解できない」と彼は答えたので、私はその  
問題の文を読み、その意味をポルトガル語で説  
明した。

日本の学校に通ったことがない私にとって、日本の学校の教科書は興味深かった。また、日本語が分かっている、それをうまく使って子どもたちに説明できなかったのが悔しかった。自分が出来ることの少なさに虚しい気持ちになった。この経験を生かして、次回機会があればやりかたを工夫してみようと思う。

## 初めてのボランティア活動



国際学部 国際文化学科 4年

土田 美幸

私は去年の11月から今年の2月まで学生ボランティアとして県南の中学校で外国人児童生徒に日本語支援を行っています。今までボランティアをしたことない私がこの活動に参加したのは、私自身も日本語が話せない時期があって同じようなボランティアの方に大変お世話になったからです。この話が来たときは「今度は自分が恩返しをする番かな」と思いました。

今回は去年の5月にフィリピンから来た中学3年の女の子に支援をしています。支援内容は日本語のサポートだけでなく、メールやSNS等を通して私生活や精神面でのサポートもできる限り行なっています。支援をしている女の子は日本で長年働いている母親と一緒に暮らしたいと思って日本に来たそうです。母親思いなうえ、努力家でとても明るく、チャーミングな子です。高校受験まで数ヶ月しかないという状況でも、彼女の頑張る姿には私も励まされています。中学校へは週に1回通い、最初の1ヶ月半はテキストを使って学校や日常で役に立つ日本語を中心に勉強をし、残りの期間で高校受験の面接対

策のサポートをしています。初めてのボランティアということもあって、最初はどのような方法で支援をするべきか戸惑いましたが、彼女と毎日積極的にコミュニケーションをとって、彼女にとって何が一番役に立つかを一緒に考えながら支援をしています。最近では彼女の日本語のインプット力がとても高まり、日本語で指示などをしても理解してもらえるようにまですなりました。これからはアウトプットの練習もたくさんしていこうと思っています。

この支援を通して私自身、いろんなことを学ばせていただいております。支援を始める前は自分も経験したことだから日本語を習っている人たちにとって何が大変かを大体把握しているつもりでしたが、支援している子に会うたびに新しい発見をしています。特に漢字を教えるのはとても大変です。小学一年で習う漢字でも音読みと訓読みを合わせて法則もなく読み方が多才な字に直面するたびに私も彼女もため息をします。また、会話の練習をしている時に日本語特有の空気を読んでその場の状況やそ